

大西先生を偲んで

石塚 知香子
東京工業大学

大西先生の業績については他の方にお譲りすることとして、本稿では大西先生の研究者・教育者としての姿で印象に残るものを皆様と共有することで、少しでも志半ばで世を去った大西先生の供養になればという気持ちで筆を執っています。ただ、大西先生のご逝去から1年が経とうとする今でも、どうしても大西先生不在の世界を受け止めることが辛く、考えがまとまらないため、本稿では内容が不連続で、まとまりのない思い出群の羅列となることをお許しください。

大西先生とは私が学部1～2年から教わる機会に恵まれて30年近くの付き合いでした。当時北大講師だった大西先生は教え方が上手で学生に人気があり、確か学部2年の講義の後にクラスの男子が中心となってサプライズバースデーを企画したことがありました。実家がケーキ屋さんだった友人たちが大西先生お誕生日おめでとう！というプレート付のホールケーキを片手に「大西先生、お誕生日おめでとうございます！ケーキ、食べてください！」と言うと、一瞬たじろいだ後に真剣な顔で「ありがとう。でも、学生さんからは何も受け取れないので、ごめんなさい。」と言って、去っていくという出来事がありました。その際の男子達のショックの大きさよ…非常に正論ですので、私は「まあ仕方ないよなあ」と思いつつも、「大西先生って人は何とクソ真面目な先生なのか」と頭を抱えたのでした。

その後、4年生の研究室配属時から縁あって大西先生の指導の下で学位取得までの6年間、研究者としての目鼻をつけていただきました。3年生で研究室を選ぶ際には色々悩んだ末に、大西先生の「何でも好きなことを研究させてやる」との一言で原子核理論研究室の門をたたくことになったことが昨日のここのように思い出されます。当時は我ながら生意気な学生で、一般相対論が好きで、素粒子論研究室のゼミに参加して場の理論も好きで、統計力学も好きなので、これらが全部活かせるような研究がしたいけれど中性子星はちょっと違うという話をしたところ、超新星爆発での核物質の研究をやるか！とのご提案いただきました。ただし手計算がある程度できると、それを計算機で実際に計算できることの間には大きな乖離があります。大西先生は両方大得意でしたので、大西先生には随分と怒鳴られたり、悲鳴をあげられたりしながら鍛えていただきました。

ちなみに私は女子学生ということもあってか、個人的に御馳走していただいたことはありません。つまり他の教え子に比べると格段に楽しい思い出というものに恵まれていないのです。これが今になって本当に悔やまれます。何か御馳走してくれるように大西先生が元気なうちにリクエストしとけばよかったということもありますが、なぜもっと良い弟子であろうと努めなかったかという想いがどうしても頭をよぎるのです。私は研究者として生きようと決めるまでに5年ほどブランクがありますが、学生時代のうちから覚悟を決め

ていれば、もっとできることがあったのではないかと悔やまれてなりません。

私が研究室に配属されたのはミレニアム問題が騒がれていた1998年です。当時も今も日本の物理学分野における女子学生の割合は低いですが、大西先生は女性研究者の地位向上にも心を砕いて学生指導するような方でした。研究室に入って最初の飲み会でのことです。学部時代は興味と時間の全てを物理に費やしており、サークル経験もバイト経験もない気の利かない学生だった私ですが、飲み会では見様見まねで先輩にお酌をしようとした瞬間に大西先生の厳しい檄が飛びました。「(周囲に向けて→)石塚さんにはお酌させないでください！(私に向けて→)お前もいいな？二度とそんな真似するなよ？女性研究者として舐められるような真似はするな。」この瞬間に私の研究室生活は少し厳しいものになりました。その後も東工大に職を得るようになって「いいか？舐められるなよ？」という大西先生の教えは徹底して続いたのでした。

ここで先述の研究者としての覚悟を決めるまでに5年を要した部分に触れたいと思います。私にとっては北大での院生時代は振り返ると下痢する程度にはストレスフルなものでした。計算が好きでコード作りもそれなりに楽しく、研究するという行為そのものは基本的に楽しめるものですが、皆様よく存知のとおりで“研究”はそれ以外の部分が実は多いです。

私は博士課程での研究会デビューが一般的だった当時としては早めの4年生から研究会に参加する機会に恵まれました。当時は現代と違って私が取り組んだ相対論的平均場などの現象論的なアプローチで天体核物理に挑戦するのは異端でした。初めての出張の際には「何を言われても驚くなよ？相対論的平均場で天体核をやるとまず笑われる。それでも気にするな！」と繰り返し、繰り返し、呪文のように諭されました。今思い返してみても自分のやっている研究は何も可笑しいことはなかったと思うのですが、本当に当時はどこで発表しても「こんな研究意味がない」としっかりはっきりと嘲笑われました。心が砕けそうになっても横でずっと「頑張れ！」と励ましてくれたのが大西先生です。何をどう頑張れと具体的に言われるわけではないのですが、「兎に角がんばれ！根性や！」と晩年までくり返し言われました。そして多少受けが悪くても成果が出れば風向きは変わるということをお西先生との共同研究で学びました。ここで皆様と共有したかったことは、大西先生の研究に対する姿勢は深く根性論に根ざしているということです。私が接した大西先生は物理の鬼のような人でした。人生で最優先すべき事項は物理であり、物理全体を押し進めるために自分ができることがあれば身を捧げることを全くいとわないという姿勢は生涯一貫していたように思います。

私が院生の時分は大西先生がまだ若手だったこともあり、先述のような学術の場での戦いは常であった上、身の回りでも自分の研究をめぐって不協和音が鳴り響くことが増え、だんだんと心身に負担がかかり、体調を崩したことを報告すると心を痛めてくれました。当時私の博士論文の課題として取り組んでいたハイペロンを含む超新星物質の状態方程式には、ハイペロンと核子の間の相互作用に関して優秀な後輩たちの成果が多く取り入れられていました。その結果皆の成果を(何故か)私が発表する場面が増えると「石塚さんの

ための研究じゃない…」と自分の研究活動が後輩の意欲を削いでいるという事実を突きつけられることも増えました。この経験は今になってPIとして学生の成果を紹介する際に非常に役立っているのですが、正直、当時はきつかった。様々な出来事を大西先生に相談しながらそんなこんなで博士課程3年になるころには、すっかり研究活動が苦痛になっておりました。

博士課程修了と同時に結婚した私は、それを理由に研究と距離を置くようになりました。夫は天文学が専門の同じ北大物理の先輩でした。その夫に帯同して渡英する頃には私は歩くのもままならない状態でしたが、「石塚さんにどうにか物理を続けさせてやってほしい。よろしくをお願いします。」と夫のところへやってきた大西先生が深々と頭を下げたそうです。大西先生はそういう人で、面と向かって応援することはなく、顔を合わせれば説教しか口から出てこない一方で、私のいない所で「石塚さんの研究成果」が消えないように5年間も弟子の居場所を死守してくれました。「研究なんか絶対にやりたくない！」と完全に殻に閉じこもっていた私ですが、そんな様子を何度も耳にするうちに、「これだけ待って、応援してくれる師匠に応えなくて良いのだろうか？いい加減に研究に向き合わなければ…」と思うようになり、帰国したタイミングで、既に北大で職を得ていた先輩に相談し、再び大学に身を寄せることにしました。幸運なことに、何人かの先生が声をかけてくださいましたが、その際にも自分のわがままで先生方にご迷惑をおかけしました。

周りの話では陰で応援してくれていたはずなのに、大西先生の私に対する教育方針は絶対自分では雇用はしないというものでした。当時、大西先生が理論班代表を務めておられた中性子星の新学術領域でポストクをすると報告した際には大西先生は怒り狂いました。雇用主の東京理科大の鈴木英之先生が「リハビリだと思って好きなことやってみなさい」と言ってくれた！何しようかなあと嬉々として伝えると「はあ？何でこの新学術でお前のような出来損ない雇わなあかんねん。お前のような奴を雇う気がしれんわ。ええか？死んでも迷惑かけんなよ？」と怒鳴りつつも、はるばる野田まで「ご迷惑をおかけします」と再び頭を下げに来てくれました。他の人が言い難いような厳しいことをきちんと伝えてくれて、相談すれば「しんどくても頑張れ」と励ましてくれ、本当に信頼できる先生でした。

話を大西先生から学んだ研究者としての指針に移します。大西先生は理論と実験の両方に造詣が深いことで知られていますが、理論屋と実験屋のベストな関係についても模索していました。どうすれば理論屋と実験屋がWIN-WINの関係になれるのか。昨今、実験との関わりが深まる中、大西先生の姿勢が共同研究する際の一つの指針となっています。大西先生が晩年特に論してくれた研究者生活で大切なことのもう一つは自分の頭の中を他者と共有することの重要性でしょうか。他の学生の研究内容に関する理論や大西先生の院生時代の仕事を北大院生時代にはバサッと渡されて「理解しておけ」というスパルタ式の教育方針でしたが、その全てが最近になって役立っています。明るく元気で議論が大好きな大西先生には、京都大学基礎物理学研究所教授というポストが非常にマッチしていました。もはやその爪の垢を煎じて飲むことは物理的に叶わなくなりましたが、研究者としての大西先生を少しぐらいは見習って生きていきたいと、今はそう思っています。

最後に大西先生との最期の方の思い出について述べようと思います。あんなに一緒に仕事をしないと書いていた大西先生ですが、2019年頃から仕事を振ってくれるようになりました。2019年頃の共著論文のほか2022年頃に別件で連絡をもらったりしてメールや電話でやり取りはあったものの、コロナ禍もあり京都から遠ざかっており、2019年を最後に3年ほど直接大西先生の顔を見ることはありませんでした。その間、大西先生は元気がないようだという話を何度か耳にしていました。そんな中、私の上司だった千葉先生の退職記念行事が2023年3月1日に予定されており、大西先生も参加予定でした。しかし、その参加を体調不良で取りやめるという連絡が2月26日にありました。こんなことは初めてで、前から体調が悪そうだとは思っていましたが、よっぽど悪いのだろうかと思ったのを覚えています。その3月末に理研で集まりがあったのですが、その場でオンライン開催の物理学会で大西先生の近影を見たという木村さんから大西先生の体調が深刻そうだと聞いて、物凄く嫌な予感がしたのを良く覚えています。その日は慌てて大学に戻って大西先生に電話しました。その後の様子から考えると、その時の大西先生は夢現だったろうと思います。癌だと話してくれました。退院できるかどうか主治医の判断次第とのことでしたが、4月3日に基研に来るといので会いに行きました。後に奥様から、本当は誰にも会いたくない、と書いていたと聞きました。

4月3日に基研で会った大西先生の姿を見て、正直なところ動揺せずにはおれなかったのですが、自分自身も病気で容貌が大きく変化したことがあるので、その時の経験から、何喰わぬ顔で、平常通りでいることに注力しました。そこに集中しすぎて気の利いたことの一つも言えなかったです。大西先生はというと、髪が抜ける前で良かったと言いながら、当日に至るまでの経緯やご家族への感謝をワーッと話されて止まらず、次第に息が上がってきているのを見て、あわてて用事を思い出したことにして研究室を後にしました。ところが私は北大時代の研究室スタッフだった吉田ひとみさんから預かった御守りを間違えて渡してしまい、今出川の駅から慌てて部屋に戻ると、相当しんどそうにしている大西先生の姿がありました。1回目の別れ際に言い忘れていた何人かの方からのお見舞いの言葉を伝え、正しい御守りと交換して、今度こそはと何とか気持ちを言葉にして絞り出しました。出てきた言葉で自分が覚えているのは「全部見ているから。全部お手本にするよ！」というのですが、どうも大西先生に響いたのは「先生の弟子で良かった」という言葉だそうです。私は気が動転していて、そんな言葉を言った記憶もないのですが、確かに大西先生は本当に良い笑顔で「ありがとう」と言ってくれ、その笑顔に救われた思いでした。後に偲ぶ会の席で奥様から、実は私が意図せず口にした弟子云々がうれしかったようだを聞いて、首を捻ったわけですが、大西先生の弟子で良かったという気持ちは本当です。その後、亡くなる直前までの様子を聞き、その研究者として、教育者として、基研の教授としての責任感の強さに言葉を失いました。見事な生き様で、最後の最後まで本当に立派な師匠でした。大西先生、お疲れ様でした。